

石のまち大谷の原風景「かやぶきの家」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

大谷が平成三十年度の日本遺産に認定された。日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じてわが国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものである。

大谷の場合、ストーリーの中心は、「まちづくりに身近に活用され、宇都宮独特な石のまちの景観を創り出してきた『大谷石文化』」である。前号で紹介した「屏風岩石材石蔵」は、大谷のまちづくりに身近に活用され、宇都宮独特な石のまちの景観を創り出してきた点で日本遺産の一部をなすといえる。



「かやぶきの家」全景

ところで大谷という石のまちの景観を創り出してきた上で、欠かせない建物がある。通称「かやぶきの家」といわれる渡辺家の屋敷構えである。屏風岩石材石蔵が大谷石産業発展期の象徴的な建物であるならば、渡辺家の屋敷構えは、農業の傍ら行われた大谷石産業初期の農家の構えを今に留めるものである。

「かやぶきの家」の持ち主である渡辺家は、江戸時代、荒針村の名主を務めた旧家である。江戸末期には農業の傍ら寺子屋を開き近隣の農民の子弟の教育に当たるとともに、家伝業を生産し地域の医療に貢献するなど当地方の典型的な名主層の家業を営んだ家である。一方、所有する石山の採掘権を採掘業者に貸出し、採掘料を得るなど大谷石の生産にもかかわった。

渡辺家の屋敷は、屏風岩石材の東隣、大谷街道の北側に位置する。鬱蒼と生い茂る杉山の麓にあり、前面に茶畑・

畑が広がり、道路を隔てて水田が開ける。山間地における旧家は、山麓に屋敷を構える傾向がある。山麓は山と農地の利用に便利な所であり、かつ、山から湧出する水の利用に便利である。山麓にあり、茅葺きの母屋を中心に江戸期から明治初期に流行った石屋根の石蔵や納屋などが織りなす渡辺家の屋敷構えは、「石のまち大谷の原風景」を呈するものである。

茅葺き屋根は、わが国の民家では最も多く用いられるものである。茅が屋根材に用いられた理由は、身近な材料で、かつ屋根葺きの費用が一番安価だったからである。かつて建築材料は、運搬の都合上身近な所にある物が用いられた。また、茅の取得や屋根葺きにかかわる労力は、専門の屋根葺き職人を除けば隣近所の相互扶助によってまかなわれた。瓦屋根などに比べ茅屋根は格段に費用が安かったのである。ところが、相互扶助組織が崩れ

た今、茅葺き屋根は最も経費のかかるものとなった。宇都宮市内でも茅葺き民家は、すっかり姿を消し、数えるほどとなった。渡辺家の現当主は、茅葺きの母屋を「かやぶきの家」と名付け存在を訴え保存に務めている。先代の当主は民芸運動に加わり濱田庄司と交わり、濱田が建てた益子参考館の大谷石蔵の移築を手掛けた。そうしたことからは濱田も渡辺家を訪れたことがある。美しい茅葺きの母屋を見た濱田は、「ぜひ、残してもらいたい」といったという。芸術に造詣深い現当主は、濱田の言葉が重く心に残り忘れられないという。



茅葺き屋根の修理

「石のまち大谷の原風景」を伝える「かやぶきの家」、壊してしまえばもとに戻すことはできない。現当主は「かやぶきの家」は、お金に変えられない心の宝だという。その心意気を皆で応援したいものだ。日本遺産大谷のためにも。